

UDLM

本号では、1月号の「都市を魅せる媒体」と対比し、
「地域」を魅せる媒体として「芸術祭」を特集する。

6

vol.347

June 30
2024

地域を魅せる芸術祭

- p.2-3 地域と芸術祭と「〇〇」
- p.4-6 デザ研メンバー芸術祭紀行
- p.7 2024年度開催予定の芸術祭
- p.8 商店街の可能性を探る

△百年後芸術祭-内房総アートフェスー 横原泰介『オン・ザ・コース』作家・横原泰介とゲスト・石川初と、干潟を歩く
photo by Tamayo SUSAKI

地域を魅せる芸術祭

1月号では「都市を魅せる」という言葉に「すでに存在しているにも関わらず認知が困難な、都市に関する／都市で起こる出来事に対して、視座を提供する行為」という意味合いを込めて、地図や写真、グラフィックデザイン、朗読など都市を魅せる「媒体」に着目した。

本号では「地域」を魅せる媒体のひとつとして、近年全国各地で開催されている「芸術祭」を特集し、デザ研メンバーらによる芸術祭紀行を募った。芸術祭はいかに地域を表現し、地域内外の人々を繋げるのか。また災害に対して、アートはどのような力を発揮しうるのか。地域芸術祭の持続性や展望についても思いを馳せたい。

地域と芸術祭と「ひと」

地域芸術祭は、様々な主体によって運用されており、地域の人々、アーティスト、鑑賞者に大別されることが多い。一方、地域の人々と一口にいても、自治体職員や地域住民、土地や建物の提供者、作品の題材になる人々もいる。また鑑賞者にも、一度きりの訪問者もいれば、毎回訪問する人、会期中何度も足を運ぶ人がいる。

そして大きな役割を担うサポーターの存在も忘れてはならない。地域芸術祭ごとに形態や役割の違いはあるものの、会期前の作品の制作や、会期中の作品や地域の案内、レストランやイベントの運営サポート、通年の修理・補修・清掃や祭事への参加などを行っている。もちろん地域の人々全員が参加することは難しく、また主体間のコミュニケーションも課題に挙げられることもあるが、一度訪問するだけでは見えにくい、人々のつながりが存在することは確かである。



1.2 瀬戸内芸術祭 こえび隊ホームページより
3 牛嶋均 「松雲海風解雲」

地域と芸術祭と「災害」

全国で大規模災害が頻発するなかで、芸術祭が行われていた地域が災害が発生する場合や（令和6年能登半島地震で被害を受けた奥能登芸術祭など）、芸術祭が行われていない地域でも災害発生後にアートプロジェクトや芸術祭が行われる事例（東日本大震災後の福島で展開されるものなど）が増加している。

災害の前後でアートが果たしうる役割は何か。何を理解し、何を表現し、何を伝え、何を記憶できるのか。アーティストらが災害後の地域に入っていくことは、地域にどのような価値を見出し、あるいは地域に価値を生み出せるのか。また芸術「祭」というかたちで行うことの意義はなにか。考えるべきことは数多くあるが、アートは時に暴力的であけすけなこともありつつも、時に大胆だが細やかな、表現力・伝承力・記憶力を持ち、人々を惹きつけ、大きな行動につながりうるのではないかと感じる。



3

芸術祭 全国マップ

日本全国で行われている芸術祭（※1）を、芸術祭名・開催都道府県・初回開催年度を調べ、リストアップした（※2）。なお、ピンクの凡例で示したものは、本号で次ページ以降にピックアップしている芸術祭である。

芸術祭といっても、最初から国際芸術祭を目指した大規模なものあれば、地域で行われるアートイベントが地道に続いてきたものもある。彫刻や映画、写真にフォーカスしたものもある。近年、こういった芸術祭が全国で多数起きていることには賛否両論があるものの、それぞれの地域との関わり方や地域の魅力の表現の仕方は特色があり、その地域に行く際の参考にしてほしい。

※1 芸術祭やアートフェスなど名称は多岐に渡るため、定期的に行われるアートプロジェクトを対象としている。

※2 東京都のものは紙面の都合上 2 つに絞ったが、リサーチ時点でも 100 以上あったため、自分の住む地域やプロジェクトで関わる地域で開催されているか、ぜひ調べられたい。

● 全国の芸術祭
● 特集した芸術祭

1	札幌国際芸術祭	北海道	2014
2	政和アート Fes	北海道	2012
3	極寒芸術祭	北海道	2012
4	飛生芸術祭	北海道	2007
5	はこだて国際民俗芸術祭	北海道	2008
6	三陸国際芸術祭	岩手県	2014
7	みちのおくの芸術祭	山形県	2014
8	Reborn-Art Festival	宮城県	2017
9	風月の芸術祭 in 白河	福島県	2004
10	小名浜国際環境芸術祭	福島県	2003
11	あいづまちなかアートプロジェクト	福島県	2013
12	重陽の芸術祭	福島県	2016
13	水と土の芸術祭	新潟県	2009
14	大地の芸術祭	新潟県	2000
15	佐渡響彩	新潟県	2000
16	桃源郷芸術祭	茨城県	2016
17	みなとメディアミュージアム	茨城県	2010
18	もてぎ里山アートフェスタ	栃木県	2007
19	中之条ビエンナーレ	群馬県	2007
20	群馬青年ビエンナーレ	群馬県	1991

21	北アルプス国際芸術祭	長野県	2017
22	天空の芸術祭	長野県	2016
23	マツモト建築芸術祭	長野県	2021
24	さいたま国際芸術祭	埼玉県	2016
25	引込線 / 放射線	埼玉県	2008
26	百年後芸術祭	千葉県	2014
27	コヅカ・アートフェスティバル	千葉県	2015
28	取手アートプロジェクト	千葉県	1999
29	千の葉の芸術祭	千葉県	2021
30	木更津みなとぐちアートプロジェクト	千葉県	2022
31	東京芸術祭	東京都	2016
32	東京ビエンナーレ	東京都	2020
33	横浜トリエンナーレ	神奈川県	2001
34	黄金町バザール	神奈川県	2008
35	金沢文庫芸術祭	神奈川県	1999
	逗子アートフェスティバル	神奈川県	1999
36	Sense Island 感覚の島	神奈川県	2022
37	伊豆高原五月祭	静岡県	1993
38	FUJI TEXTILE WEEK 布の芸術祭	山梨県	2021
39	ATAMI ART GRANT	静岡県	2021

40	ビエンナーレ TOYAMA	富山県	2015
41	奥能登国際芸術祭	石川県	2017
42	飛騨高山文化芸術祭こだま〜れ	岐阜県	2013
43	清流の国ぎふ芸術祭	岐阜県	2017
44	ながくてアートフェスティバル	愛知県	2013
45	国際芸術祭あいち	愛知県	2010
46	BIWAKO ビエンナーレ	滋賀県	2001
47	亀山トリエンナーレ	三重県	2008
48	奈良・町家の芸術祭 はならあと	奈良県	2011
49	みんな芸	奈良県	2014
50	学園前アートフェスタ	奈良県	2015
51	くどやま芸術祭	和歌山県	2016
52	KINAN ART WEEK	和歌山県	2021
53	KYOTO EXPERIMENT	京都府	2010
54	木津川アート	京都府	2010
55	KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭	京都府	2013
56	ALTERNATIVE KYOTO	京都府	2013
57	堂島リバービエンナーレ	大阪府	2009
58	大阪関西国際芸術祭	大阪府	2009
59	姫路城 現代美術ビエンナーレ	兵庫県	2008
60	鉱山と道の芸術祭	兵庫県	2019
61	生野ルートダルジャン芸術祭	兵庫県	2011
60	あまがさきアート・ストロール	兵庫県	2022
62	アート de 元気ネットワークひょうご	兵庫県	2015
63	岡山芸術交流	岡山県	2016
64	かがわ・山なみ芸術祭	香川県	2013
65	瀬戸内国際芸術祭	岡山・香川	2010
66	道後アート	愛媛県	2014
67	岩美現代美術展	鳥取県	2009
68	西条酒蔵芸術祭	広島県	2013
69	ひろしまトリエンナーレ	広島県	2020
70	UBE ビエンナーレ	山口県	2011
71	山口ゆめ回廊博覧会	山口県	2021
72	糸島国際芸術祭	福岡県	2012
73	北九州未来創造芸術祭	福岡県	2021
74	多久市アートフェス	佐賀県	2017
75	菊池アートフェスティバル	熊本県	2017
76	ART FAIR ASIA FUKUOKA	福岡県	2015
77	対馬アートファンタジア	長崎県	2011
78	Art Seeds Hirado	長崎県	2021
79	種子島宇宙芸術祭	鹿児島県	2017
80	やんばるアートフェスティバル	沖縄県	2017
81	AOMORI GOKAN アートフェス	青森県	2024
82	森の芸術祭 岡山	岡山県	2024

デザ研メンバー芸術祭紀行



榎原 泰介 + 石川 初「干潟を歩く」

photo by Yuto MIYAZONO

百年後芸術祭

内房総アートフェス2024

一百年後を考える芸術祭

百年後芸術祭は、自然、文化資源、豊かな千葉を舞台に、「アート」「テクノロジー」「音楽」「食」、そしてそれらからの「学び」を通じて、一緒に百年後を創っていく共創の場としての芸術祭を目指している。私は開催期間中に3度訪れ、作品群を巡りつつ2つのイベントに参加した。

一オン・ザ・コース、干潟を歩く

河岸を玄関口として栄えた木更津市は、かつて港付近まで浅瀬が広がっていた。東京湾に残る干潟をリサーチしてきた榎原泰介は、木更津の広大な自然干潟に着目し、人間と環境の関係性を考える展示とツアーを行う。前者は、江戸時代に建てられた「紅雲堂書店」を会場に、干潟をゴルフコースに見立てた映像やドローイング、地図など、干潟の風景や生物を題材とした作品と、関連書籍が展示されていた。

後者は毎回異なるゲストとともに実際に干潟を散策するツアーで、私はランドスケープ・アーキテクト・石川初をゲストに迎えた回に参加した。榎原から盤洲干潟の成り立ちや特性、ゴルフコースに見立てた作品に関する説明を受けて、理解を深めつつ、石川の独自の視点で、どこまでも薄く水面が続く干潟をウユニ塩湖に見立てたり、干潟の砂のかたちからタイヤを探す目を養ったりと、干潟を「発見」していく体験となった。

一新たなコミュニティを形成する

展覧会や芸術祭という期間が限定されるのが常だが、百年後芸術祭には様々な主体が関わっており、日常的に制作と展示が営まれ続ける作品群が存在するのも特徴である。

代表的な事例としては、月出工舎 (ARS TSUKIDE) である。月出工舎は、現在から地続きの未来を多視点な角度から捉え、美術、建築、音楽、デザイン、ダンス、農学、社会学、生命研究と分野や世代を超えて共振する場をつくり、新しい世界観・知を創生することを目指している。廃校となった旧月出小学校を舞台に、一年を通して「遊・学・匠・食」の4つのプロジェクトが展開され、独自にアーティストを招聘したり、カフェを運営したり、伝統的な製法で壁やかまどを作ったりなどの活動が行われている。

地域内外の人々が通い、みんなで作る「新しいがっこう」というスタイルを取り、ひとつのコミュニティを形成している。

一ツアーという演劇を通じて学びを深める

劇団・東京デスロックは「Anti-Human Education」シリーズとして、犯罪者やネグレクト加害者などを演じる教育論、コロナ禍における学校現場の再現など、「教育」をテーマにした授業体験型演劇作品を上演してきた。

今回は修学旅行を模したシリーズ第6弾のツアー型演劇に参加した。小湊鉄道沿線にある藤本壮介による公衆トイレを回り、食事と排泄、公共空間とプライベート空間、ジェンダー問題など、トイレを巡る諸問題を広く捉えるツアーであった。

修学旅行という形態のためか、ともに制作作業に取り組んだり、演劇的ふるまいが求められたりと、ツアー参加者同士やアーティストとのやりとりが多く、最後にはジェンダーに関する活発な議論を交わすこともできた。

(M1 洲崎)



- 1 榎原 泰介 + 石川 初 「干潟を歩く」
- 2 干潟でウユニ塩湖ごっこ
- 3 岡田杏里 「月が生まれたとき」
- 4 塩月洋生 「間(あわい)」
- 5 南市原をイメージした珈琲焙煎所で地元食材を使ったフードも提供
※3, 4, 5 は月出公舎のプロジェクト
- 6 東京デスロック
Anti-Human Education VIシリーズ
「トイレを巡る修学旅行」





磯辺行久「川はどこへいった」

photo by Osamu NAKAMURA

大地の芸術祭

越後妻有アートトリエンナーレ2022

一地域芸術祭のパイオニア

大地の芸術祭は、新潟県十日町市・津南町に、200以上の作品が点在して展示される、地域芸術祭のパイオニア的存在である。

一川はどこへいった

数多くの作品のなかでも、磯辺行久の「大地の芸術祭と地域環境ー越後妻有における地域資源の継承ー」という作品に強く惹かれた。磯辺は1950年代から60年代にはワッペン・版画の制作で注目を集めたが、1965年にペンシルヴェニア大学大学院で自然科学を修了後、環境プランナーとして活躍する。近年はエコロジカル・プランニングと社会・文化人類学的方法論に着目したプロジェクトを行っている。大地の芸術祭では、「大地」そのものをテーマに取り扱ったプロジェクト群に取り組み、信濃川の昔の姿や川の瀬替え、土石流の痕跡、越後妻有の歴史文化と人々との関わりを、現地で可視化し伝達する作品群を発表している。

一「大地ー地域」に対するアプローチ

清津峡渓谷トンネルの景観美を見せる「Tunnel of Light」や、廃校した奴奈川小学校で展示・パフォーマンスのみならず農業に関する授業や地元食材の提供が行われるなど、「大地ー地域」に対するアプローチは作家や場所ごとに異なり、その在り方や価値を改めて考える旅となった。

(M1 洲崎)



一地域でアートをやる意味とは

2022年の秋、新潟県の大地的芸術祭を訪れた。1泊2日の滞在中、一番最後に訪れた美術館で、はじめて地域住民と遭遇した。美術館までお散歩に来ていた幼稚園の子どもたちである。その美術館の菜園広場では、芸術祭の1作品として菜園の地下にTVスタジオが設けられ、モグラの仮装をしたパーソナリティが時折、土の中の天窓から顔を出していた。子どもたちは、話しかけてくるモグラに少し怯えながら、10秒ほどじっくり見つめては去ることを繰り返していた。モグラから離れた子どもたちは、私たち来街者に元気に挨拶をしてくれた。アートと地域の密接な関係を見ることを期待していたが、実態は少し違った。

滞在を振り返っても、来街者・アーティスト・地域という

三者の関係を考えると、アーティストが地域の深層を作品を通じて象徴し、来街者に伝えている、というようには感じなかった。来街者がアートを鑑賞する場と、来街者が地域と触れる場が、たまたま近接している、という方があっているように感じる。地域でアートをやる意味とは何か、その本質はまだ捉えられない。

(M2 森屋)



1 磯辺行久 「川はどこへいった」

2 地元のジビエや野菜を使ったレストランメニュー

3 奴奈川キャンパス cafeteria GAKUSYOKU

4 マ・ヤンソン/MAD アーキテクト 「Tunnel of Light」

5 開発好明 「モグラTV」

6 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 「Three Travellers」

※5, 6 photo by Yusuke MORIYA



布の芸術祭

FUJI TEXTILE WEEK 2023

巨大な廃工場を活用した、ネリー・アガシ
「mountain wishes come true」 photo by Junya ITO



千年以上続く織物産地、山梨県富士吉田市。伝統産業及び地域活性化を目的とし、テキスタイルと芸術が融合した国内唯一の布の芸術祭「FUJI TEXTILE WEEK」は、地域と密接に繋がっている。

私は昨年富士吉田に住んでいたが、そうした繋がりは大きく三点あると感じた。まず作品。大前提として、全展示が地場産業のテキスタイルをテーマに制作される。次に、場所。展示は複数会場に分散され、展示を巡るうちに自然とまち歩きへ誘われる。また、巨大な廃織維工場や、布が取引されていた空き店舗など、機織り産業のレガシーが会場として活用される。最後に人。富士吉田のクリエイティブ界隈がイベントの運営を通して交流を深める他、アーティストが地元の機屋さんとコラボレーションする。また、地元の子どもの作品展示や、ボランティアへの地元のおばちゃんの参加など、地域の人々もイベントに関わる設計がされている。

一方、こうした工夫にも関わらず、まだ住民には市民権が得られていない点は課題である。複数会場での展示や機織りのレガシー施設の活用といった取組は素晴らしいが、結果的にイベントの存在自体が少し見えづらくなっている。より多くの市民へ周知を行うとともに、空間的にもよりパブリックに開く余地があると感じた。

(M2 伊藤)



準備は工場を清掃するところから始まった photo by Junya ITO

会場：山梨県富士吉田市下吉田本町通り周辺地域
会期：2023年11月23日～12月17日



ヨリヤス(ヤシン・アラウイ・イスマイリ) 「KIF KIF KYOTO」

京都国際写真祭

KYOTO GRAPHIE 2024

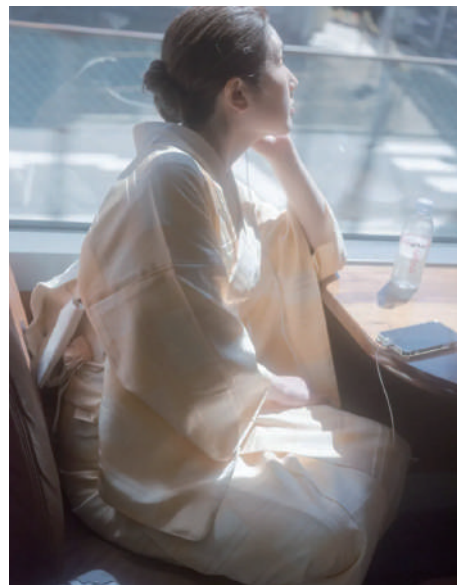
KYOTO GRAPHIE は、京都を舞台に開催される、日本では数少ない国際的な写真祭だ。今回は、サテライトプログラムである「KG+」の2企画を訪れた。

まず訪れたのは、烏丸御池の駅から歩いて5分ほどのギャラリーでおこなわれた「ゆっくり、しっかり、のこす：着物を考えるための調べもの」。老舗着物メーカー問屋が、最新技術を駆使して着物のあり方をとらえ直すこの企画では、洋服の人も着物の人も、思い思いの感想を述べながら会場を巡る。着物姿のある人は、「そんなに扱いにくいものなんやろか」とつぶやく、そんな姿も展示の一部となっていた。

もうひとつは、出町柳商店街の一角にておこなわれた、モロッコの写真家の作品の展示「KIF KIF KYOTO」。京都で学生生活を送る弟と訪れたのだが、彼に馴染みのある風景が斬新な形で被写体として切り取られていたようで、声を弾ませながらその場所でのエピソードを話してくれたのが印象的だ。

日常の中にふと展開される展示は、自らに内面化しやすいのだろうか、などと考えながら京都を去った。日帰り(しかも合間時間で)の鑑賞ではまったく時間が足りない、贅沢すぎる写真祭だった。

(M2 山田)



YSN STUDIO

「ゆっくり、しっかり、のこす：着物を考えるための調べもの」

会場：京都府京都市

会期：2024年4月13日～5月12日

2024年開催予定の地域芸術祭たち

大地の芸術祭

越後妻有アートトリエンナーレ2024

新潟県十日町市・津南町の約760km²の土地に、200点以上の作品が点在して展示される。世界最大級の国際芸術祭であり、全国で開催されている地域芸術祭のパイオニア的存在で今年で25周年を迎える。総合ディレクターは北川フラム。豪雪という厳しい条件のなかで米づくりをしてきた越後妻有では、人々は自然との関わり方を探りながら集落を営んできた。そこから生まれた「人間は自然に内包される」という基本理念が全てのプログラムに貫かれている。

会場：越後妻有地域（新潟県十日町市、津南町）

会期：7月13日～11月10日

（一社）十日町市観光協会



森の芸術祭

晴れの国・岡山

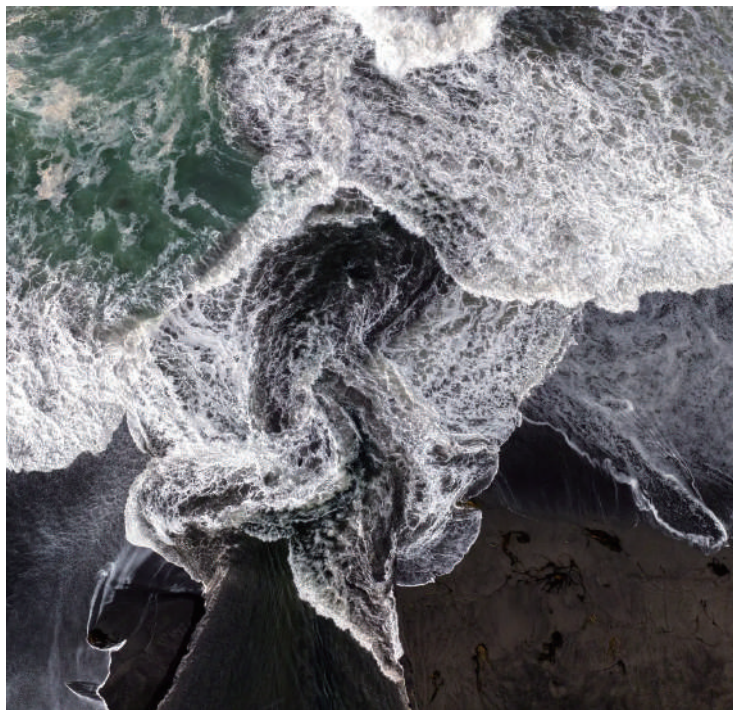
中国山地の雄大な自然に加え、旧街道の宿場町や城下町として栄えた歴史ある街並み、古くから受け継がれた伝統、芸能、多彩な農産物など、魅力的な風景・文化・地域資源が数多くある岡山中「森の芸術祭 晴れの国・岡山」が初開催される。アートディレクターは、金沢21世紀美術館館長、キュレーター兼美術評論家である長谷川祐子。

「森」がもたらす「恵み」を芸術の力で未来に向けて活性化することを目的とし、「本当に必要な資本とは何か？」を問いかける。美術館や記念館や学校などの文化施設、水やエネルギー、食の供給といった生活のインフラ、自然環境を共通の資本と考え、アーティストのみならず、建築家、科学者、民俗学者といった専門家も交え、地域の人々の協力を得ながら「新しい資本」をつくりあげる。

会場：岡山県内の12市町村

会期：9月28日～11月24日

川内倫子 無題（シリーズ〈Illuminance〉より）



AOMORI GOKAN

アートフェス2024 つらなりのはらっぱ

青森県内の5つの美術館・アートセンターが中心となり、芸術祭を初開催する。「つらなりのはらっぱ」をテーマに、ディレクターは置かず、この地域に根差して活動する各館のキュレーターが協働するスタイルを取る。青森県内の5つの美術館・アートセンターが中心となり、芸術祭を初開催する。「つらなりのはらっぱ」をテーマに、ディレクターは置かず、この地域に根差して活動する各館のキュレーターが協働するスタイルを取る。

会場：青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館

会期：4月13日～9月1日

岩根愛 「The Opening」

学生の研究活動紹介 - 修士1年 木村千咲さん -

商店街の可能性をさぐる

都市デザイン研究室というプロジェクト活動が目目されがちだが、本号では学生の研究活動紹介と題し、修士1年木村千咲さんのフィールドワーク (feat. 中島教授) の様子をお届けする。今回のフィールドワークの目的は、

商店街の現状を知るとともに、切り口になる視点を得ること。商店街ならではの良さを未来へ継ぐ可能性を提示したいと意気込む木村さんがピックアップした注目ポイントたちを、調査ルートと合わせて紹介する。



修士1年 木村千咲さん

中島先生のお話を含め、様々な気づきを得るフィールドワークとなった。杉並区内だけでも商店街の状況や成り立ちは様々で、商店街を扱う難しさを感じた一方で、ウォーカビリティの面では切り口として可能性も感じた。今回の調査をこれからの研究に活かして頑張ります！



中島直人教授

木村さんが提案したルートは、私の自宅を包囲するように引かれていた。何だ、私の日常生活圏を歩くのかと、子供とともに気軽に参加したところ、まちあるきの不思議。歩くことは考えること。商業集積に対する理解が深まった。

COLUMN

WEB MAGAZINE

廃墟再生マルシェ作戦会議



#みなかみプロジェクト

廃墟再生マルシェを、温泉街の方々と一緒に考えるための作戦会議。先日、その第3回が行われました。開催予定地のまちあるきをしながら、温泉街に対する率直な思いをお聞きすることができました！(M2元吉)

続きはコチラ >>>

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



五條天神社例大祭参加！

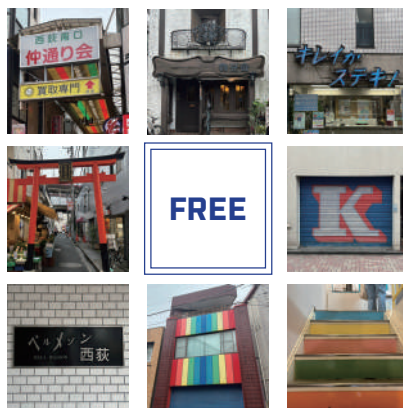


#上野プロジェクト

不忍池のほとりにある五條天神社の例大祭で御神輿を担がさせていただきました。まちの方々の熱気と優しさに包まれながら、晴天の中を練り歩きました！達成感の中帰宅し、肩を見るとあざだらけに…！(M2水野)

MACHI BINGO

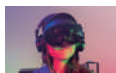
マガジン片手に、まちを歩こう



西荻窪

まちビンゴ第2弾は商店街フィールドワークに合わせて西荻窪を取り上げました。商店街ごとに並ぶお店や雰囲気の違いが見られるので、歩きがい満点。紹介ルートを参考に、商店街をめぐる歩きながらビンゴの完成を目指してみてください！(M1星)

6月号担当 M2 洲崎玉代



本号では、1月号に特集した「都市を魅せる媒体」に対比させ、「地域」を魅せる媒体のひとつとして「芸術祭」に注目した。芸術祭は、地域資源を発見し、それを様々な表現方法で魅せ、地域の人々との関わり代となりうる一方、芸術祭が全国各地で乱立するなかで、地域にとっての価値が問われている。今一度その価値と課題、展望を考える機会となった。